

文化としての富士

——変転する象徴——

平井修成

一 富士の美しさの「理由」

富士は美しい。このことに異を唱える人は、余りないだろう。しかし、富士はなぜ美しいのかと、その理由を問われると、答えることは簡単ではない。

その、富士の美しさの〈理由〉を説明しようとした一人が、志賀重昂である。

志賀重昂の『日本風景論』は、明治二十七年十月に初版が出て、明治三十五年四月の増訂十四版まで増補が重ねられた。この期間は、日清戦争開戦（明治二十七年八月）の直後から、日露戦争の二年前までに当たる。いわば、日本のナショナルリズムが高揚した時期であり、『日本風景論』もその影響を受けて、記述の主潮は我が国の風景が他に優れた特徴を備えていることを強調する。

そして、富士に関しては、

「名山」中の最「名山」を

(三)富士山

となす。豈に一辞一句だに自美自讃を要せんや、聴けこの山に對する世界の嘆声を。(注1)

として、富士を賛美した中国、朝鮮、オランダ、英国の文献を引用・提示した上で、「然れども理學上その優絶なる所は竟に説かざるべからず。」と、富士の名山である所以を客観的に説明しようとする。

……けだし理學上富士山の優絶なる所は、その麓底の平面より峰頂に到るまで、同一距離の縦坐標を以て山を幾個に横切し、一對の縦坐標の加をその差を以て除するに常に不変数の商を得、宛として對數曲線の定則を表はすにあり。この規律の斉整に加ふるに、至妙なる美術的体式を以てす、(注2)

これが、その説明である。

「宛として對數曲線の定則を表はす」とは、富士山の傾斜が、標高が高くなるにつれて、一定の割合で増していくことを意味する。富士山は円錐形の独立峰であるが、単純な円錐形ではなく、この傾斜の規則正しい変化によって、その「優絶なる」美しさが創られているというのである。

説明は、例えば、縦と横の長さの比が黄金比である長方形が、最も美しい長方形だというのと同じで、経験的に美であるものが内包する数学的性質を指摘したものである(注3)。つまり、ここに発見された数学的特徴は、経験からの帰納であって、それが美である理由を、その特徴から直接に証明するものではないのである。

では、こうした努力は、富士が名山であることを語る上で、全く無効なのであるか。そうではない。富士に関する志賀重昂の数学的説明は、富士が他の山々に隔絶した形態的特徴を持つことを、確かに告げているからである。

自然界には、数学的な性質をそのまま示す形 \parallel 抽象を敢えて必要

としないそれ自体が抽象的な形は、ほとんど存在しない。スタンリー・キューブリック監督の『2001年宇宙の旅』（注4）の冒頭、突然出現した直方体の石柱（モノリス）を見て、猿たちが知恵付き人間への歩みを始めるシーンは、極めて印象的であった。抽象の概念こそ、人間を自然から引き剥がすものであったことを、それは示している。

だから、富士が「対数曲線の定則を表はす」なら、それは富士が、諸般の山々と異質な、敢えて言えば非自然的な印象を与える存在であることを意味する。富士が名山であるか、美しいかという問題は「先ず措くとしても、この山は紛れもなく「特別なものとして注目される山」なのである。

二 富士への注目

富士は注目すべき山であった。しかし、富士の何に注目すべきかという点になると、その焦点はいささか定まらなかったように思われる。

山部赤人の次の長歌は、富士を題材にした最も早いものの一つであろう。

なまよみの 甲斐の國 うち寄する 駿河の國と ちちごちの
國のみ中ゆ 出で立てる 不盡の高嶺は 大雲も い行きはば
かり 飛ぶ鳥も 飛びも上らず 燃ゆる火を 雪もち消ち 降
る雪を 火もち消ちつつ 言ひもえず 名づけも知らず 靈し
くもいます神かも 石花の海と 名づけてあるも その山の
つつめる海そ 不盡河と 人の渡るも その山の 水の激ちそ
日の本の 大和の國の 鎮とも 座す神かも 寶とも 生れ

る山かも 駿河なる 不盡の高嶺は 見れど飽かぬかも（注5）
「見れど飽かぬかも」と富士の魅力を視覚的なものとして一応は了解しながら、それだけでは納得し得ない、富士への深い讃仰の思いが、ここには現れている。言い換えれば、感動が余りにも大きい故に、その感動をもたらしただけのもの所在を捉えかねている様子が、ここには見て取れる。

「燃ゆる火を 雪もち消ち 降る雪を 火もち消ちつつ」「石花の海と 名づけてあるも その山の つつめる海そ 不盡河と 人の渡るも その山の 水の激ちそ」——富士が火山であること（中世までは火口から煙が立ち上っていた）、夏にも山頂付近の雪が消えないこと、麓に巨大な湖が存在する（貞観六年の噴火で、西湖、精進湖に分かれるまで、富士の北麓には石花の海という大きな湖が存在した）こと、富士川という急流が富士山から流れ出ている（実際は鋸岳や八ヶ岳に源流がある）ことなどが描かれているが、それらは直接、「見れど飽かぬ」富士の視覚的特徴と結び付くものではないのだ。

この富士の形態的秀麗の軽視は、他のよく知られた富士を扱った作品にも共通する。

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらん

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは塩尻のやうになんありける。

有名な『伊勢物語』の「東下り」の一節である。ここでは富士は、先ず夏の積雪に関わって注目され、もちろん高さについても「比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほど」と留意されている。しかし、

その形態については、ただ「塩尻のやうに」と記されるばかりなのである。塩尻とは「塩田で、砂を丸く高く塚のように積みあげたもの」(『広辞苑』第四版)のことである。日本最高峰の、あの雄大な景観を比喻するには、余りにも小規模な存在である。

菅原孝標女の『更級日記』には、父に伴って上総の国から上洛する途次、富士を間近く眺めた経験が記されている。

……わが生いいでし國にては西をもてに見えし山也。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積りたれば、色濃き衣に、白きあこめ着たらむやうに見えて、山の頂のすこし平ぎたるより、煙は立ちのぼる。夕暮れは火の燃え立つも見ゆ。

「その山のさま、いと世に見えぬさまなり」と、その姿の特殊性―優越性への言及はあるが、「色濃き衣に、白きあこめ着たらむやうに見えて」という表現は、先の塩尻の場合と同じく、やはり富士の景観的魅力を矮小化しているようにも思われる。

エドウィン・O・ライシャワの『ザ・ジャパニーズ』は、日本と日本人の全体像を極めてバランスよく描ききった名著とされていて、その冒頭、「舞台 1 国土」に於いて、富士は次のように言及されている。

完璧な円錐形火山として知られる富士山(略)地域で、もっとも新しい爆発は一七〇七年である。現在は三千七百七十六メートルの高さを誇り、一方の山稜は海からそそり出ている。その姿は莊重といてよく、そのために富士山は、日本人の芸術生活や文学伝統の中でたえず強く意識されてきた。(注6)

この発言に異を唱える必要はもちろん無いが、姿の莊重に、十分な敬意が常に払われていたわけではないことも、特に古い時代に於

いてそうであったことも、確かなようである。都と富士の距離の隔たりが、あるいは関係しているのであろうか。

さらに、遠い時代の文芸の中に富士が扱われる時、しばしば留意されたのは、この山の持つ「機能的側面」とも言うべきものであった。

例えば『竹取物語』では、富士の山容は、全く問題にされない。

『竹取物語』には、帝が、かぐや姫の残した「不死の薬」を焼く場所として、最も月に近い場所を探したとき、それが富士の山頂であったこと、その焼いた煙が今も山頂から立ち上っていること、そして「不死の薬」を焼いたので、山の名が「ふじ」となったことが記されている。高さ、噴煙が上がる理由、そこで行われた出来事に由来する地名の起源などが強く意識されているのである。

『常陸国風土記』『筑波郡』には、富士と筑波に関わって、次のような物語が伝えられている。

神祖の尊が福慈―ふじ―の神に一夜の宿りを頼むが断られた時に、是に、神祖(みおや)の尊、恨み泣きて警告(の)りたまひけらく、「即ち汝(いまし)が親ぞ。何ぞ宿さまく欲(ほ)りせぬ。汝が居(す)める山は、生涯(いき)の極み、冬も夏も雪ふり霜おきて、冷寒重襲(さむさしき)り、人民(ひと)登らず、飲食(を)しもの)な奠(まつ)りそ」とのりたまひき。

しかし、筑波山に行って宿を頼んだ時には、筑波の神が快く泊めてくれたので、「神祖の尊」は喜んで、筑波山を祝福する歌を歌った。それで、「福慈の岳は、常に雪ふりて登臨することを得ず。其の筑波の岳は、往集ひて歌ひ舞ひ飲み喫ふこと、今に至るまで絶えず」ようになったという。

ここでは、富士の雪・寒さ という〈機能〉が、説話に不可欠の要素となっているのである。

こうした説話に於ける富士の扱われ方などから類推して考えると、先に引用した赤人の長歌の反歌、あの余りにも有名な、

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不盡の高嶺に雪は降りける(注7)

の歌も、富士の全容とよりも、季節に関わらず雪が積もっているという、その不思議な現象そのものへの注目が主題であると考えるところも出来るようである。

もちろん、右の歌を反歌とする長歌は、「神さびて 高く貴き駿河なる 布士の高嶺を」といった部分を含むのであり、全容に着目していることは確かであるが、しかし長歌は又、「渡る日の影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も 行きはばかり 時じくそ 雪は降りける」と、富士とそれを取り巻いてある〈部分〉に注意を向けている。中でも、「照る月の 光も見えず」は、「渡る日の影も隠らひ」から対句的に導かれたと想像され、ならば、富士の風景を詠んだ歌は、風景としての富士を、よくは見えていなかったとさえ言い得るのである。

そして、和歌の題材となった富士は、しばしばその火山としての性質が、恋の情熱の比喩として使われることとなった。「富士の嶺の噴きあげる炎や煙をただちに人間の恋心の火に結びつけるという、きわめて広範囲な文化的合意が、古代からはっきり確立されていた」と述べたのは大岡信である(『富士の歌——文化としての富士』(注8))。『富士の歌——文化としての富士』には、例証として数多くの歌が挙げられているが、中から二首を左に記す。

我恋のもえて空にもまがひなばふじの煙といづれ高けん

(新勅撰集・藤原道家)
富士のねのけぶりの末は跡なくともゆる思ひぞ身をもはなれず
(続千載集・亀山院)

三 景観への賛美とその表現的困難

近世以降になると、富士に、純粹に風景としての価値を見出そうとする傾向が強くなる。

当山は三国無双の名山、伊豆甲斐駿河三ヶ国に跨るといへども、駿河のふじといふなればこぞ正面ならん

宝永六(1799)刊の地誌、大曾根佐兵衛著『東海道駅路の鈴』の一節である。「こぞ正面ならん」という言い方からは、その全景を眺めて楽しむという富士に対する興味の持ち方がうかがえる。

亦、

不二を見ぬ奴が作りし実語教
といった川柳も存在する(注9)

「実語教」とは、仏教や儒教の經典の教えを暗誦に適するように漢詩風に構成した児童教訓書である。江戸時代には、「童子教」と並び、主要な寺子屋の教科書であった。「実語教」は、「山高故不貴 以有樹為貴 人肥故不貴 以有智為貴」から始まっている。句は、その冒頭の一句「山高故不貴」を踏まえて、富士の貴さを逆説的に強調しているのである。山の高さが、山を貴いものと感じさせるとは、取りも直さず、視覚的な了解が感動を与えたことを示唆している。

そして、北斎の「富嶽三十六景」を始めとする富士を題材とした風景画が多数描かれることになる。もつとも、これ等の風景画は、

〈富士を題材とする〉と単純に言い切ってしまうには問題を含まないのだが、そのことは後に述べよう。ここでは、風景画として富士を描こうとした志向が、近世の多くの画家達に存在したこと、そのことに留意しておきたい。「江戸時代になると、富士山は画題として定着した。」と「富士山絵画の歴史」(注10)は総括している。

なぜ近世に至って、富士は、物語のアイテムや恋の情熱の隠喩ではなく、風景それ自体として扱われるという傾向が強まったのか。この点について、今は明確な理由を述べる用意が無い。ただ、国民精神の変化に関わる仮説的な可能性を述べておくにとどめる。

西鶴の『好色一代男』は、次のように書き出されている。

桜もちるに歎き、月はかぎりありて入佐山。爰に但馬の國かねほる里の邊に、浮世の事を外になして、色道ふたつに寝ても覚ても夢介とかえ名よばれて、『好色一代男』巻一「けした所が戀のはじまり」

この「桜もちるに歎き、月はかぎりありて入佐山」と「かねほる里の邊に(略)色道ふたつに寝ても覚ても」の対比が、中世的無常観と近世的な人間肯定思想の対比、そして後者の優越を宣揚するものであるとは、しばしば指摘される場所である。もちろん、その通りであるが、もう一面、ここには自然的なものと人文的なものと分離が、示唆されているのではないだろうか。かつて、人間的な怒りや恋を象徴し、あるいは塩尻や着物のスケールにまで矮小化されていた風景は、人間とは独立したものと意識されたのである。

そして、例えば次のような例は、自然と人文との分離を、極めて意識的に強調している。

……貞観の富士、天明の浅間、左久羅島等は其熾んなる物ぞといふべし、抑山海僻陋の國にはさる災異ある事、和漢共にあまた見えて、大都平原の地にはおのづからさる事ありとも聞えざりき。

(略)

神の怒に觸るは山海陋僻の國のみかは、且かたへなる國なりとも多くの人の中には物よく學びたりとも學ばずとも行ひ宜しきが、僧俗共にあるべきものぞ(注11)

天明三年七月の浅間山の大噴火を踏まえて記されたものである。自然災害が、そこに住む住人の振る舞いや道徳などとは無縁であることを述べている。懷徳堂などを中心に、この時代に盛行した合理主義的思考に沿ったものと言ってよいが、自然的風景を風景それ自体として扱おうとする態度に、それは繋がるものであろう。

だが、いざ富士を、純粹に風景として題材にしようとする、それがとてつもなく困難だということに、近世の芸術家達は気付いたようなのだ。先にも引用した『富士の歌——文化としての富士』からの孫引きにもなるが、蕉門の俳人松倉嵐蘭の『富士ノ賦』(注12)に、次の一節がある。

むかしより詩歌連俳の句数、合せてこれをつままば、大かた此の山の高さには比せむ。されど古今の間、ただ一首秀でたる者は、赤人の白妙なるべし。その余は此の山に対して、万が一にも及ばず、吾翁、富士吉野の句、一生なしとかや。東路に赴く人は、かくなりがたきふじの詠に、心力を費し、又あづま路におもむかぬ人は、かく有難き富士を見ずして、一生を終はるも、共に残り多き事なるべし。

事情は、富士を題材とした絵画に、隠れようもなく現れている。例えば、北斎の「富嶽三十六景」の中に、富士そのものを主題に描いた作品は、厳密に言えば、「凱風快晴」と「山下白雨」の二点だけなのだ。「神奈川沖浪裏」は、この連作中の白眉であるが、波頭のダイナミズムにこそ主題があり、富士は、画面の奥に点景として描かれるに過ぎない。「上総の海路」「隅田川関屋の里」等々、何れも興趣の中心は、富士の景観ではないであろう。

広重の「富士三十六景」も同様である。全ての画面に富士は描かれているが、ほとんどの場合、それは小さく後景となっている。

狩野惟部の「富嶽十二ヶ月図巻」などは、比較的富士を大きく描いた連作であるが、やはり、富士の景観の変化とよりは、富士の前景にある風景の変化を楽しむものとなっている（注13）。例えば、「八月 秋草の武蔵野・満月に雁」と「十一月 雪景色・水鳥」を較べてみれば、富士そのものの描写に関しては、全くと言っていい程、違いが無いのである。

富士を描くことは困難であった。より正確に言えば、富士を多彩に描くことは困難であった。その為、絵は、富士の周囲を、あるいは前景を描くことで、富士を描くおもしろさとしたのであろう。そして文学は、富士の前に沈黙したのだ。「吾翁（芭蕉）、富士吉野の句、一生なしとかや。」と述べた『富士ノ賦』は、「西行は五文字をすへかね。」とも記している。

勝景であることは誰一人疑わなくとも、それを表現することが困難であった理由は、容易に想像することが出来る。富士は、自然の景観としては、余りにも単純なのだ。ここで再び、志賀重昂の「対数曲線の定則を表はす」という発言を思い起こすべきであろう。富

士の姿が〈数学的〉に描写され得るということは、それが多様な描写の可能性を持ち難いことを意味する。もちろん、眺める角度による微妙な形態の変化はあろうし、色彩や空気の透明度に関わる変化はあろう。しかし、自然景観一般に比して、創作の自由はかなり制限的に表現者に感じられるのではないだろうか。

そして、この制限的な〈感じ〉は、近代に至って、富士に対するアンビバレントな思いを、日本人の中に引き起こすことになる。

四 近代精神と富士

近代に於いて、富士は急速に日本の国家的象徴となっていく。その事情を、かなり皮肉っぽく語って見せたのが、夏目漱石の『三四郎』である。

三四郎は、大学に入学する為に上京する列車の中で、一人の男と知り合いになる。彼は、三四郎に、次のように語る。

いくら日露戦争に勝って、一等国になってもだめですね。（略）
あなたは東京がはじめてなら、まだ富士山を見たことがないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものは何もない。ところがその富士山は天然自然に昔からあったものなんだからしかたがない。我々がこしらえたものじゃない

「日露戦争以後こんな人間に出会うとは思ってもよらなかった。」というのが、三四郎が最初に抱いた感想である。『三四郎』は、明治四十一年、九月から十二月にかけて、朝日新聞に連載された。ロシアに対する勝利で、日本のナショナルリズムが高揚していた時期に当たる。日露戦争が日本の勝利に終わったのは、『三四郎』発表の三

年前である。

右の男の言葉が漱石の思想そのものであるかどうかは些か疑問があるが、「男」が語ったのは、自然の勝景は、近代文明国家の価値ではないということである。いかにも明治という時代を感じさせる発言である。

ところで、この発言は、富士が、当時の国民にとってどのような存在であったかを逆説的に示唆している。「あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものは何もない。」——言い換えれば、日本人にとって、対外的に自慢するものが富士だったということになる。漱石のような優れた知性が何と思おうと、民衆的レヴェルでは、富士は、日本を誇らかに語るキーワードだったのである。

「国民が永遠に愛唱すべき国民歌」として、昭和十二年、内閣情報局によって公募され当選した『愛国行進曲』一番の歌詞は、明確に且つ肯定的に、富士を日本を比喻するものとして扱っている。

見よ東海の空明けて

旭日高く輝けば

天地の正気潑漑と

希望は踊る大八洲

おお晴朗の朝雲に

聳ゆる富士の姿こそ

金甌無欠揺るぎなき

わが日本の誇りなれ

この傾向は、戦後も一貫して続き、例えば、愛国的な雰囲気を感じとなく伝えたい場合などに、富士の映像を使うといったことが行われてきた。戦後何十年かを経て、日本共産党は、党のポスターに富士山の写真を使った。このポスターのデザインについて、次のよ

うな意見があるのは興味深い。

私が一番驚いたのは、共産党の選挙ポスターが富士山になり、赤旗の宣伝文句が「正義の味方、真実の友」になったときである。この時点で共産党は「愛国主義」を採用し、同時に階級対立の議論を放棄した。「富士山」日本国の象徴であり、保守側のイメージであった。(注14)

日の丸や旭日旗を使うわけに行かない共産党の、苦肉の策が富士の映像の使用だったのであるうか。あるいは、事情は全く異なるのかも知れないが、ポスターがそのような印象を与えたのは、事実である。

道徳や正義、気高さ、向上心や克己心など、人生に肯定的な価値が強調される局面では、富士はしばしば象徴的な役割を果たしてきた。こうした局面の典型的なものは、学校での校歌の斉唱であるが、富士を間近にする静岡県東部地域では、小中高校の七割で、校歌の歌詞に「富士」が使われている。しかも、その半数近く(四割五分)は、〈ふじを手本にしよう〉という内容の歌詞であるという(注15)。常葉学園歌の三番が、「けだかくも純らに生き」るべき人生の隠喩として、富士を歌っていることは言うまでもない。

一方、近代は、富士への嫌悪も生んだ。

ここから見た富士は、むかしから富士三景の一つにかぞへられてゐるのださうであるが、私は、あまり好かなかった。好かないばかりか、軽蔑さへした。(略)私は、ひとめ見て、狼狽し、顔を赤らめた。これは、まるで、風呂屋のペンキ画だ。芝居の書割だ。どうにも注文どほりの景色で、私は、恥づかしくてならなかった。

大宰治の『富嶽百景』(注16)の一節である。大宰治にとって、富士はなぜ「軽蔑さへ」すべきものであり、「恥づかしくてならぬ」思いを抱かせるものなのだろうか。

否、これほどあからさまでなくとも、富士は、近代の文学者には、余り好まれていないようである。先に引用した『三四郎』は、もちろん富士そのものを否定しているわけではないが、富士への好感は全くといっていいほど感じられない。武田泰淳の『富士』(注17)は、戦中の富士山麓の精神病院を舞台にした大作であるが、精神病院の渾沌を、端正な富士の姿と対比させ、真実を前者の側に求めているようにも思われる。

石川淳のような〈現代的〉作家の出現以降、少しずつ修正されてはいるが、近代文学の重視する主題は自我意識の对象的了解に他ならない。葛藤し続ける固有の精神の動態こそが、描くべき対象だったのである。『こころ』の「先生」や『人間失格』の大庭葉蔵は、有り体に言えば、男らしさといった価値とは無縁の人物である。彼等が、というより彼等を描くことが評価されるのは、彼等の決断力のなさ、終点の見えぬ悩みを描出を通じて、あるグループ——日本人とか、武士とか、生徒とかいったグループ——の一員であったとしても、そうしたグループの属性では自足し得ない人生の姿が立ち現れてくるからに他ならない。全ての人間が、例えば一流企業の名刺を持つ会社員が、そうであるように。

近代に富士が肯定的な価値を象徴する場合、それがほとんど例外なく「集団」の文脈に於いて現れていることに留意しよう。数学的に表現され得るこの山の単純な形態は、苦悩する自我の隠喩には馴染まないものだ。

国民と個人、あるいは組織と個という、近代を特徴付ける乖離的

な人間存在の様態が、富士への賛美と嫌悪に反映されていると云ってよい。

* * *

富士は特別な存在であった。しかし、その特別性は、必ずしも明確に捉えられて来たわけではない。風景の価値を、独立的なものとして認めようという思想の不在が、その了解を妨げたこともあった。余りに抽象化され易いものに感じられる形態が、芸術的想像力の躍動に立ちだかつたこともあった。そして、国民と自我というアンビバレントな二つの人間像の登場する近代という時代に、富士は賛美の対象でもあり嫌悪の対象でもあった。

言い得るのは、日本人と日本文化にとって、富士が常に心に掛かる存在だったということである。その点で、比叡も筑波も白山も足下にも及ばない。「富士は日本一の山」なのである。

(注)

1. 平成七年九月 岩波文庫『日本風景論』
近藤信行校訂 九十四頁。改行は原本通り。
2. 同前、九十六〜七頁。
3. 縦横の比が黄金比である長方形が、最も美しい長方形である理由は、原理的な考察に基づくものではない。「黄金比はパルテノン神殿やピラミッドといった歴史的建造物、美術品の中に見出すことができるという。また、自然界にも現れ、植物の葉の並び方や巻き貝の中にも見付けることができる」といった主張がある。こ

- これらの主張から、最も安定し美しい比率とされ」(Wikipedia「黄金比」h2410080931の記載)ているだけである。つまり、美しいと感じられたものに於いて見出されたから、美しいとされているのであり、その美が直接的に証明されたわけではない。
1. 一千九百六十八年 メトロ・ゴールドデン・メイヤー制作。
 2. 『万葉集』巻第三 三百十九番歌。
 3. 昭和五十四年六月 國弘正雄訳 文藝春秋 二十二頁。
 4. 『万葉集』巻第三 三百十八番歌。
 5. 「富士山」昭和六十年五月 新潮社 所収 三十八頁。
 6. 大曲駒村編著『川柳大辞典』下巻 昭和三十七年五月 高橋書店 【富士】の項。
 7. 「富士山の絵画 収蔵品図録」平成十六年二月 静岡県立美術館 九十五頁。
 8. 上田秋成『浅間の煙』天明三(1783)年秋。
 9. 『富士ノ賦』の全文は、五老井(森川)許六の編んだ「風俗文選」巻之二、宝永三(1706)年刊、に収められている。「風俗文選」は岩波文庫(平成十六年二月 十一刷)で読むことが出来る。
 10. 平成十二年八月 静岡県立美術館・滋賀県立近代美術館共同企画展「日本画の情景——富士山・琵琶湖から」図録 三十五〜七頁 参照。
 11. 「日本共産党 最近おかしくないですか!？」http://egalite65.com/99_blank025.html。
 12. 川内利一『近代歌謡に見る富士山』平成九年三月 「富士山をよむ―常葉学園短期大学公開講座論集―」清水銀行発行 所収。
 13. 昭和十四年二月 「文体」所収。
 14. 昭和四十六年 中央公論社刊。